

研究ノート

# 柱松行事再考

八 木 透

〔抄 録〕

京都北部から若狭にかけて広がる丹波山地の奥にたたずむ山里では、「松上げ」とよばれる勇壮な火の祭礼が行われる。松上げの古風な形態は、各村の愛宕を祀る山の頂で松明を燃やし、また神木である松の古木に向かって松明を投げ上げるものであった。この神木は一般に「柱松」とよばれるもので、修験道の行事と深い関わりをもつ。つまり「松上げ」は、山伏の験力を競う一種の競技が民間に流布したものと考えられる。このように、修験道とかかわりの深い「松上げ」と、盆の送り火の原型だとされる「十二灯」の2種の松明行事を取り上げ、両者の相関性とそれぞれの行事の変遷過程について考察することにより、火が風流化を遂げてゆく民俗信仰の実態とその歴史の変遷について考える。

キーワード 松上げ、十二灯、柱松、送り火、修験道

## はじめに

私たちの暮らしにおいて、火は必要不可欠な存在である。あらゆる動物の中で、火を自在に操ることができるのは人類だけである。火を操れるか否かが、人間と動物を区別する一番重要な基準であり、同時に「文化」と「自然」を分けるメルクマールでもある。人類がここまで高度な文化を築き上げることができたのは、すべて火を自在に操れたからであるといっても過言ではない。

火は、元来極めて素朴な存在である。しかし私たちの先祖は、いつしか火を華美に飾ることを覚えた。さまざまな趣向を凝らし、飾り立てることによって火は美しく変身し、元の素朴な火とはまったくの別物と化す。まさに多くの人々に鑑賞されるための存在として生まれ変わるのである。このような火の変身は「風流化する火」、あるいは「芸能化する火」と表現すべきである。火がもっとも美しく生まれ変わった典型例は、打ち上げ花火であろう。花火も元は信仰に根ざしたものであったが、やがて信仰だけが忘れられ、近年は人々を楽しませる夏の娯楽

として広まった。花火以外にも、火が人に見られるために美しく、華麗に変身した例は全国各地で見出すことができる。

本小論では、風流化する火の中で、特に修験道とかかわりの深い「松上げ」と、盆の送り火の原型だとされる「十二灯」の2種の松明行事に関して、北近畿地方のいくつかの事例を紹介しながら、両者の相関性とそれぞれの行事の変遷過程について考察することにより、火が風流化を遂げてゆく民俗信仰的背景とその歴史の変遷について、改めて考えてみたい。

## 1、柱松行事としての松上げ

京都北部の丹波から若狭にかけての山村では、一般に「松上げ」とよばれる夏の松明行事が伝承されている。松上げは、基本的には愛宕信仰に基づく火伏せの民俗行事であるが、実際の松上げ行事はきわめて複雑な様相を呈している。今日でも松上げの行事を伝えているのは、京都市北区雲ヶ畑・左京区花背八榎・広河原・久多、右京区京北町小塩（旧北桑田郡京北町小塩）・丹南市美山町芦生（旧北桑田郡美山町芦生）など多くを数えることができる。それらの中で花背八榎と広河原、および雲ヶ畑の事例を紹介したい。

### 【事例①・左京区花背八榎・広河原】

左京区花背八榎では、かつては8月24日に松上げが行なわれていたが、今日では8月15日の夜に行なわれるようになった。多数の男性の力が必要とされる松上げを維持してゆくために、村を離れている若者たちが故郷へ戻ってくる盆の期間に行事の日を移動したためである。松上



写真① トロギ建て（広河原）



写真② 立ち上がったトロギ (広河原)



写真③ 広河原の松上げ

げはかつての修験道の影響から、準備から本番まですべてが男性のみによって行なわれ、女性は一切関与できないことになっている。松上げの当日、八楸の集落では、上桂川が大きく蛇行するトロギバ（灯籠木場）とよばれる平地の中央に、先端にモジとよばれる籠状の松明受けを取り付けた、高さ約20メートルの松の巨大な柱が垂直に立てられる。夕刻になるとその周囲には千本近いジマツ（地松）が立てられる。やがてネギ（禰宜）とよばれる村の神職を中心とした役員たちが、村内にある愛宕社から種火を松明に移し、トロギバに到着すると、一斉に地松に火が灯される。やがて8時すぎ、鐘と太鼓を合図にトロギバに集まった男たちは、一斉に先端のモジを目指して上げ松を投げ始める。降り注ぐ火の粉の中、男たちは上げ松を拾っては投げ、また拾っては投げ続ける。やがてだれかの投げた上げ松がモジに入ると、行事はいよいよクライマックスを迎える。モジが炎を上げて勢よく燃え始めたかと思うと、瞬時にしてトロギを支えていた綱が切られてトロギは倒され、松上げは一瞬にして終わる。

一方広河原では、毎年8月24日の夜に、花背八楸と同様の松上げが行なわれる。広河原の松上げの大きな特色は、行事の1週間ほど前に、普段は旧美山町との境界である佐々里峠に祀られている地蔵を村内の観音堂に移すことである。この地蔵は松上げが済むまで村内で祀られ、やがてまた峠の堂に戻される。これは松上げが地蔵祭のひとつの形態として伝えられてきたことを物語る例である。

#### 【事例②・北区雲ヶ畑】

加茂川の源流にあたる北区雲ヶ畑では、毎年8月24日に、中畑と出谷という村内の2地区で別々に松上げが行われる。雲ヶ畑の松上げは、若衆組とよばれる、16歳から35歳までの男子が



写真④ 雲ヶ畑松上げ

中心となり、それぞれの地区にある愛宕山とよばれる小高い山の頂上で行なわれる。雲ヶ畑の松上げは、鉄製の棒に竹で枠組みを作ってそこに松明を括り付け、ある漢字の形を作ってそれを立てるという方法を取っている。またその年に何という文字が上がるのかが点火まで秘密にされていることも特徴である。これは愛宕信仰に根ざした松上げの行事だとしながら、実際には、京都の五山送り火とまったく同じ形態の松明行事であるということができる。

さて、松上げに用いられるトロギとよばれる神木は、一般に「柱松」とよばれる。柱松の起源に関しては、種々の解釈がなされているが、少なくとも柱松が巨大化し、行事が風流化してゆく背景には、修験道の何らかの影響があったことは疑いないものと思われる。すなわち、2基の柱松を立てて山伏がこれに駆け登り、火打ち石で発火させ、人々の煩惱を焼き尽くす儀礼が、やがて山伏の験力を競う一種の競技となり、それが民間に流布して、今日の松上げの基礎が形作られたものと考えられる。しかし雲ヶ畑の松上げは、山頂で松の割り木を用いて文字の形を描くという独自の形態をとっており、その意味で他地域と比べて特異な松上げだといえる。

このような勇壮な松上げの形態はいつ頃、どのようにして作られたのであろうか。さらに松上げの古い形とは如何なるものだったのだろうか。たとえば筆者の過去の調査から、左京区久多では、古くは愛宕を祀る山の頂で松上げが行われていたという。また福井県遠敷郡名田庄村の奥坂本地域に属する大滝では、かつては愛宕を祀る山頂の松の古木に松明を放り上げていたが、今日では愛宕の祭場へローソクを持って参るのみであるという伝承が聞かれる。また同村の坂本地域に属する井上と佐野では、2村共同で毎年8月15日に松上げを行なっているが、かつては8月24日にも、山の中腹にある愛宕社の近くの古木に松明を放り上げていたという。さらに同村の三重地域に属する尾之内では、少し前までは8月24日に山の頂上で松上げを行なっていたが、火災があって以後は村内の公園で行なっているという。

これらの事例から、どうやら松上げの古い形態は、各村の愛宕を祀る山の頂で松明を焚き、また神木である松の古木に向かって松明を投げ上げるものであったと考えることができる。それが、行事が風流化する過程において祭場が徐々に里へと移動し、かつ規模が大きくなって、やがて今日見られるような壮大な火祭りとしての松上げが作られたものと思われる。その意味で、松上げも元来は火伏せを願う人々の祈りの対象である、素朴な炎であったといえるだろう。ならば雲ヶ畑のような、山に文字を描くという形式の松上げの起源はどこに求められるのだろうか。この問題を考えるために、次節では福井県小浜市、大飯郡おおい町（旧大飯町）、京丹後市久美浜町の事例を紹介しよう。

## 2、若狭と丹後のオオガセと十二灯

夏の夜に行われる松明行事の分布は、先述した京都府北部の山村を経て、北は若狭の小浜か

らおおい町、西は舞鶴から丹後半島、さらには兵庫県但馬地域へと広がっている。それらの中で、本節ではまず小浜市、おおい町、久美浜町（現京丹後市）の事例を紹介する。

### 【事例③・おおい町福谷】

おおい町内の多くの村では、8月下旬にオオガセとよばれる松明行事が行われる。中でも福谷のオオガセは県の無形民俗文化財に指定され、村に伝わる伝承では、今から約600年前に始められたといわれている。ここではカタヤマ（片山）はよくないので、必ず2度行なうといわれるように、カセヤマ（火勢山）とよばれる山の頂きで、8月23日には伊射奈伎神社へ、翌24日には熊野神社へそれぞれ奉納するために、2夜続けて



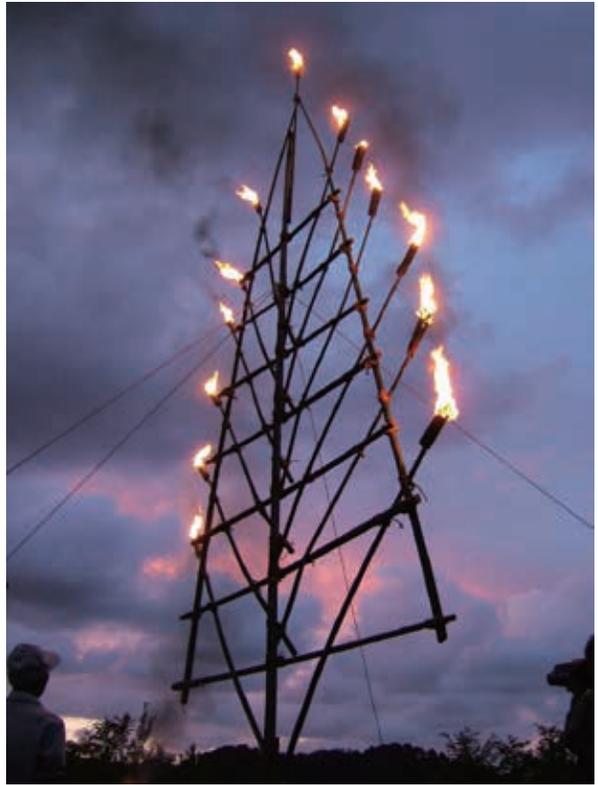
写真⑤ オオガセ（おおい町福谷）

オオガセが行なわれるのが特色である。両日共、まず愛宕神社から受けてきた火を松明に移し、鉦や太鼓を鳴らしながら火勢山へ登り、まず皆で盆踊りを踊る。その後種火がオオガセの先端に付けられたシнтаイマツ（芯松明）とよばれる大きな松明に移され、鉦と笛と太鼓の囃しにあわせてオオガセを回転させ、倒してはまた起こし、これが繰り返される。このように、オオガセは松上げとはまた異なった、独特の勇壮さと迫力を見せる炎の祭礼である。

### 【事例④・久美浜町河梨】

丹後半島の西隅に位置する熊野郡久美浜町河梨（現京丹後市）では、毎年8月23日の夜に、「十二灯」と称する松明行事が行われる。夕刻4時頃から、何人かの村人が氏神の神谷神社へ行き、愛宕社の灯明を蚊取り線香に移して十二灯の舞台となる万灯山へ運ぶ。河梨の集落の東に愛宕山とよばれる小高い山があり、その頂には愛宕社を祀っているという。一方村の男たちは十二灯の材料である真竹や稲縄などを担ぎ、万灯山の頂上へ登り、皆で分担して十二灯を作る。松明部分は10年ほど前までは松の割り木を使用していたというが、近年松枯れが激しく、松が入手しにくくなったことから、現在では乾燥した竹の割り木を用いている。灯油を十分染ませた布の周囲に竹の割り木を巻いてゆくという方法がとられている。

夕刻5時半すぎ、辺りがやや薄暗くなる頃に、種火を移したトウミョウ（灯明）とよばれる松明を高々と掲げる。これが十二灯行事開始の先触れでもあり、また愛宕への献火を意味しているのではないかと考えられる。午後6時半頃、いよいよ十二灯を垂直に立てる作業に入る。十二灯が垂直に立つと、若者たちが十二灯に攀じ登り、灯明の火を移した松明の火で13個の松明に火を付けてゆく。そして十二灯を愛宕山の方角に向け、参加者全員が愛宕山に向けて手を合わせる。また、かつては十二灯に火が灯ってしばらくすると、男の子たちが燈明の松明を持って山道を下り、集落を流れる大神谷川の両岸で縄の先に火の付いた松明を括り付けて振り回したというが、今ではこの行事は行われていない。なお、河梨の十二灯と同種の行事は、隣村の神谷や河内でも明治末頃まで行われていたというが、今日では伝承が断片的に伝わるのみである。



写真⑥ 河梨十二灯

### 【事例⑤・小浜市小屋】

小浜市の南部に位置する田村川流域の中名田地域では、村単位でさまざまな形式の松明行事が行われているが、それらの中から小屋地区の事例を紹介する。小屋地区の奥小屋・中小屋・口小屋では、1970年代まで、山の中腹の広場でデンドコと称される松明行事が行なわれていたという。奥小屋と中小屋で共同、口小屋は単独で、9月24日にデンドコと称して、柱の上にオガラ（オガラの傘）を4個つけ、さらに柱の横に2個の傘をつけたものに火をつけ、立ててから回転させたという。これは松上げとオオガセのまさしく中間の形態のものとして注目に値する。また今日でも6月24日には京都の愛宕山への代参も行なわれているという。

以上、紹介してきた若狭から丹後にかけての3地域の松明行事は、先述した松上げとは異なり、特に福谷のオオガセと河梨の十二灯では、檜の主柱を縦軸として、そこに5本から7本の横木を取り付け、その先端に松明を括りつけるという形態をとっている。さらにオオガセでは、

垂直に立てられた松明本体を回転させ、また地面に倒し、また立てるというところに特質が認められる。そこでは松明の火が激しく揺すられて、火の粉が辺り一面に飛び散るのであり、そこにオオガセの醍醐味があるといえよう。

一方松上げは、垂直に立てられたトロギは地面に固定され、その先端めがけて、小さな松明を投げ上げるという点に特徴がある。「上げ松」あるいは「放り上げ松」などとよばれる松明が、暗闇の中を飛び交い、トロギの先端に取り付けられたモジに「一の松」が乗ると、炎が夏の夜空を焦がさんとばかりに赤々と燃え盛る。このような情景こそが松上げの真髓であり、この行事がいかに勇壮さを醸す所以でもある。

このように考えてみれば、松上げとオオガセとは、松明自体の構造や形状はまったく異なるものだという点を改めて感じる。ところが、小浜市小屋で、かつて行われていたというデンデコとよばれる松明行事は、主柱に横木を取り付けないという点では松上げと共通するが、主柱に取り付けられた数箇所の松明に火をつけて回転させるという点では、オオガセとも類似している。まさに松上げとオオガセの中間的な形態だといえるだろう。

一方で、松明行事の背景にある民俗信仰に注目してみると、オオガセや十二灯には愛宕信仰の影響が見られる。デンデコにおいても、愛宕信仰の影響は少なからずうかがえることから、これらの松明行事も基本的には松上げと同様に、火伏せの信仰が背景にあることは疑う余地はない。しかしおおい町内のオオガセの事例を丹念に見てゆくと、必ずしも愛宕信仰との繋がりうかがえる例ばかりではない。何よりもおおい町の松明行事で注目すべき点は、片松明はよくないので、松明行事を2度行なうという伝承が広く伝えられていることである。

福谷のようにオオガセを2度行なう例もあるが、岡安・小車田・鹿野では、オオガセと松上げが別々に伝承されている。たとえば岡安では「松上げ」と「カセアゲ」という別々の行事が行われている。これらの行事日は、前者は7月24日と8月24日の2度行なわれていたというが、後者は8月14日から15日にかけて行なわれる。また小車田では、もともと「オオガセ」と「松上げ」が別々に行なわれていたというが、今日では松上げだけでオオガセは行なわれていない。また鹿野でも、もともとオオガセと松上げが両方行なわれていたというが、今日では8月15日のオオガセだけで、松上げは行なわれていない。

以上の諸事例から考えると、「オオガセ」と「松上げ」という松明行事が基本的に別の意味を有する行事であったことを髣髴とさせる。また行事日を見ると、「オオガセ」は8月15日前後の時期に、「松上げ」は7月あるいは8月の24日前後の時期に行われるという例が多いことから、福谷を含めていくつかの例外はあるにせよ、オオガセはどちらかというとい盆の精霊まつりとしての意味合いが強く、松上げは愛宕火としての意味合いが強いという傾向を指摘することができるだろう。

### 3, 松明行事の系譜と風流化

筆者は拙稿において、「精霊を供養し、あの世へ送るための盆の万灯籠としての松明行事と、愛宕信仰に基づく火伏せのための松明行事とは、基本的に別個の系譜を持つ行事であると考えたい」と述べたことがある<sup>(1)</sup>。ただし、いくつかの系譜を示す松明行事の起源とその変遷、特に風流化を遂げてゆく過程について、もう少し丁寧な説明が必要であったと考える。そこで改めて、この問題に関して整理してみたいと思う。

まず、花背八柵や広河原で行われている松明行事、これを仮に「柱松系の松明行事」とよぶことにする。「柱松系の松明行事」の起源は、その名の通り修験道の「柱松」の行事であることは間違いなさであろう。その原初形態は、少なくとも丹波や若狭においては、既述したように、山の頂にある松のご神木に火を供える、あるいはご神木に向かって小さな松明を投げ上げるという比較的素朴なものであったと思われる。そしてこのような行事の背景には、基本的には愛宕信仰の影響があったと考えられる。京都の愛宕山に集まっていた修験者たちが里へ下り、愛宕信仰を広く村々に広めて歩いたのがいつ頃のことであるのか、詳細は不明だが、おそらく近世以降には愛宕修験の影響を受けた宗教者たちが丹波から若狭、さらに丹後から但馬、そして摂津から播磨へと愛宕信仰を流布して歩いたのだろう。

このような宗教者の影響を受けて、はじめは山中で行われていた素朴な火の神事が、やがて行事の舞台が里の広場へと移され、同時に規模も大きくなってゆき、さらに鉦や太鼓という鳴り物をとともうようになって、まさしく風流化を遂げていったのではないだろうか。このような変遷の道を辿って今日に至っているのが、【事例①】の花脊八柵と広河原の松上げである。また、そこまで風流化はせずに、その過程段階で止まった姿を今に伝えている例は無数に存在する。それは若狭名田庄村や小浜市の山村に見られる、比較的小規模な松上げである。

たとえば船井郡日吉町（現南丹市日吉町）牧山で8月24日に行われる松明行事、同西胡麻新町で8月23日（現在では日曜日）に行われる松明行事、また綾部市老富町大唐内で8月24日に行われる松明行事などは、小規模ながら柱松の系譜を引く行事であり、そこには古くから愛宕信仰の影響が見られる。このように、丹波山地には松上げ系の素朴な松明行事が数多く分布しているのである。

ところが、【事例②】の雲ヶ畑の松上げは、名称的には「柱松系の松明行事」に含まれるのだが、雲ヶ畑の松上げの形式が作られる背景には、異なった別の行事の影響があったものと考えられる。これを仮に「十二灯系の松明行事」とよぶことにする。

「十二灯系の松明行事」の原初形態は、植木行宣がいう「十二灯型万灯籠」であることは明らかである。植木は京都周辺の松明行事の風流化について総括的に考察した論文の中で、「十二灯型万灯籠」について、「万灯籠には十二（ないし十三）の火を意匠とする一つの型があったことが考えられる。十二はいうまでもなく一年の象徴であり、万灯籠を点す郷村の民の豊作

祈願の心意を含むものでもあろう。15世紀に姿を表した万灯籠はそのような十二灯型を基本にしたものと考えてよいであろう。十二灯型の形態は、カセをキャンバスにして火の点で意匠を表現するところに特色をもつ。その表現の方式は字や図を描くのにまことに適したものであった。十二灯型はそもそもそれを生かした結果であり、しかもそれは動いたのである」<sup>(2)</sup>と述べる。

さらに「十二灯型万灯籠」と「五山送り火」との繋がりに関して、「京都五山の送り火は万灯籠の行事であった。その成立をそれが現在みるような意匠に定まった時点とするならば、一六世紀中頃かとするほかはない。万灯籠はしかし、それ以前に流動する火の風流として展開していたのであり、15世紀半ば過ぎには成立していたのである。もちろんそこには変遷があり、カセに松明を付けて点す十二灯型から、その意匠の字や図に趣向をこらすものへ、さらにはその巨大化とともに山の斜面で火を焚くものへと展開し、五山送り火となって固定したのである」<sup>(3)</sup>と述べ、五山の送り火の起源を「十二灯型万灯籠」であると明確に論じている。このような「十二灯型万灯籠」の形式を残した松明行事がおおい町のオオガセであり、河梨の十二灯である。また他にも、舞鶴市吉原で毎年8月15日に行われるマンドロなども明らかに「十二灯系の松明行事」である。

一方で、名称や行事の起源は「松上げ系の松明行事」の系譜を引きながら、形状だけは「十二灯型万灯籠」の影響を受けて成立したのが、雲が畑の松上げであり、その影響を中途半端に受けながら、結果的には「松上げ系の松明行事」と「十二灯系の松明行事」との中間的な形で止まってしまったのが、小浜市小屋のデンデコであると位置づけることができるだろう。

#### 4、五山送り火の創始と変遷

ならば、毎年8月16日に京都盆地を取り巻く山々で行われる五山送り火は、いずれの松明行事なのか。それは植木も述べているように、いうまでもなく「十二灯系の松明行事」であると考えられる。ここで京都の送り火の創始と変遷について概観しておこう。

京都では先祖の霊を、親しみを込めて「オショライさん」とよぶ。盆に戻ってきたオショライさんは、それぞれの家々で丁重なもてなしを受け、8月16日に再びあの世へ帰ってゆく。古くは盆花やダンゴなどの供物とともに、16日の夕刻に鴨川あるいは堀川に流し、それによって先祖の霊を送ることが習わしとされてきた。そしてその頃には、京都盆地を取り囲む山々に、大文字に代表される盆の送り火が灯される。

送り火の起源は植木も述べているように、「万灯籠」や「千灯籠」などよばれた、室町時代以降に京都と周辺地域で行われてきた灯籠行事だと考えられる<sup>(4)</sup>。万灯籠とは、送り火と同じようにあの世から戻ってきた先祖を供養し、この火に照らしてあの世へ送るための灯籠行事を指す。本来はきわめて素朴な送り火の行事がやがて華美に変身し、多くの人たちに見せるた

めに風流化したのが万灯笼である。その結果作られたのが、先述した「十二灯」とよばれる万灯笼である。京都では「十二灯」の火がさらに風流化して五山の送り火になったと考えられる。

このように、五山の送り火は万灯笼の行事が元であり、それがさまざまに変化する過程で、山の斜面に火床を築き、そこに松明で大きな文字やさまざまな図柄を描くという発想が生み出されて完成した、特異な万灯笼の行事であるといえよう。やがてそれが江戸時代初期頃には、京都の夏の年中行事として定着したのである。

今日の京都では、8月16日の夜8時から約20分の間に、5分間隔で東山如意ヶ岳（大文字山）の大文字、松ヶ崎万灯笼山と大黒天山に妙法、西賀茂船山に船形万灯笼、金閣寺裏手の大北山に左大文字、嵯峨鳥居本の曼荼羅山に鳥居形松明の5つの送り火が次々と点火される。

大文字送り火が史料上に登場するのは、慶長8年（1603）の『慶長日件録』という公家の舟橋秀賢の日記が初見である。旧7月16日の条に「晩に及び冷泉亭に行く、山々に灯を焼く、見物に東河原に出でおわんぬ」と記されており、これは明らかに大文字送り火のことであろうと思われる<sup>(5)</sup>。

つまり送り火は、近世以降に大文字を皮切りに、徐々に作られて、それがやがて年中行事として固定化していったものと考えることが妥当だといえよう。しかしそれは、明らかに室町時代の「十二灯型万灯笼」の系譜を有し、十二灯の松明行事が風流化を遂げ、山の斜面に火床を築いて点火することで、今まで以上に巨大化し、また遠方からも見ることができるようになり、それが都の盆を飾る伝統行事として定着していったといえるだろう。

ところで、大文字の「大」にはどのような意味が託されているのだろうか。これについても諸説があるが、筆者は中国の古代仏教思想である「五大」に由来するものではないかと考えて



写真⑦ 大文字送り火

いる。「五大」とは宇宙を構成している主要な5つの要素を意味し、地・水・火・風・空を指す。そういえば西国33ヶ所観音霊場の第17番札所でもある、古刹の六波羅蜜寺では、毎年盆の万灯会において本堂内に「大」のお燈明が浮かび上がる。この行事は応和3年（963）に開祖である空也上人によって始められたと伝えられており、以来千年以上にわたってずっと続けられているという。これも明らかに「五大」に由来するものと考えられる。もしかすると、大文字送り火を考案した者は、六波羅蜜寺の万灯会の「大」のお燈明からヒントを得たのでないかと考えられる。だとすれば、大文字送り火のルーツは六波羅蜜寺の万灯会にあるといえるだろう。

今日でこそ「五山の送り火」と称され、上記の5つの送り火だけが昔からあったようなイメージを与えるが、かつての京都にはもっとたくさんの送り火が存在したといわれている。たとえば明治20年代の新聞には、「市原村のいの字」や「一乗寺の竿に鈴」という送り火の記事が見える。さらに十八世紀には「鳴滝の一の字」という送り火に関する記事もあり、どうやら昔は上記の五山以外に、「い」・「竿に鈴」・「一」などという送り火が存在したようである。これらの送り火は何らかの理由で早くに廃絶したようで、今日では正確な点火場所すらもわかっていない。これらはまさに幻の送り火なのである。

## むすびにかえて

これまで、「柱松系松明行事」と「十二灯系松明行事」という2種の異なった松明行事の起源と変遷について私見を述べてきたが、まだまだ未解決の問題が数多く残されている。たとえば、筆者は「柱松系の松明行事」の原初形態は、山にある神木に火を供える、あるいは松明を投げ上げるという素朴な行事であり、その背景には愛宕信仰の影響があったと述べた。しかし愛宕信仰が民間の村々に流布され、人々の間に広がったのがいつのことであるのか。またこのような松明行事は、成立段階から愛宕信仰の影響をはたして受けていたのか。筆者は少なくとも対象地域を北近畿地方に限っていえば、松上げに代表される柱松系松明行事の成立段階には、すでに愛宕を中心とした修験系の宗教者が何らかの影響を与えていたのではないかと考えている。だからこそ、はじめはきわめて素朴な松明であったものが、やがて風流化を遂げて巨大な柱松に成長し、芸術的要素を纏った松明行事として発展していったのだろうと思われる。

また柱松系松明行事は何も松上げだけではない。たとえば和歌山県すさみ市佐本では、毎年8月16日に「柱松」とよばれる、松上げと同種の松明行事が行われている。他にも、和歌山県大地町、同紀宝町、愛媛県八幡浜市、山口県光市などでも柱松行事が伝えられており、これらは、熊野修験や石鎚修験などの影響を受けた松明行事であることは想像に難くない。他にも、たとえば和歌森太郎によれば、戸隠・妙高・彦山などの古くから修験道が根付いている地域に柱松行事が伝えられており、これらのことから、やはり民間で伝承されてきた柱松行事は、

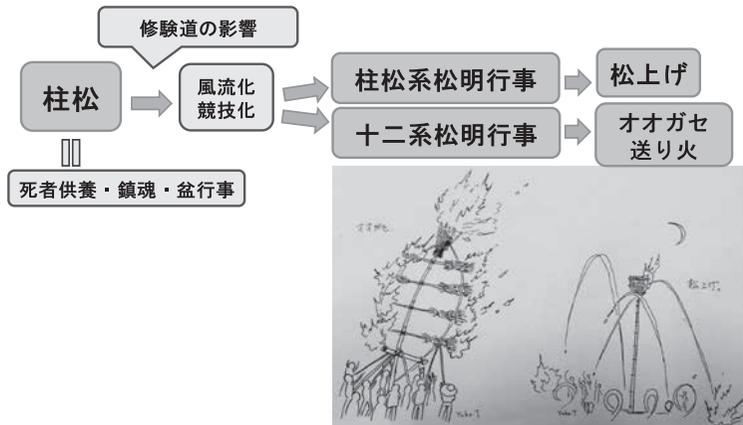
その成立段階において修験系宗教者の何らかの影響を受けていたのではないかと考えられる<sup>(6)</sup>。

一方「十二灯系の松明行事」は、植木の論考からもうかがえるように、原初の段階ですでに風流化した松明行事であると考えられる。ならば風流化する以前の形態はいかなるものであったのか。また、それははたして柱松とは異なる形状のものであったのか、あるいは同系のものであったのか。十二灯型万灯籠が成立する以前に、もしかすると柱松に似た素朴な松明があり、それが何らかの影響を与えてカセを用いる形に発展して、十二灯系の松明行事が形成されたという可能性も考えられる。先行研究において、柳田国男や和歌森太郎は、少なくとも柱松の発祥は室町時代であり、その原初形態は人の背丈かその倍程度の大きさの柱で、それは盆の迎え火や送り火の性格を有し、かつ年占的な意味合いを持って伝承されてきたものに、やがて修験道の影響が加わって風流化を遂げたとする説を提唱している<sup>(7)</sup>。

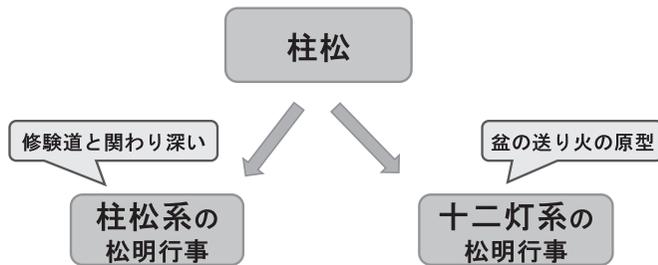
ところで、松上げや十二灯等の松明行事のルーツに関して、近年、佛教大学総合研究所における共同研究「現代社会における宗教の力」の成果論文として刊行された、榎本福寿の「浄土神楽と中世芸能」において新たな説が提示された<sup>(8)</sup>。榎本は南方熊楠の説を引きながら、「柱松」は鎌倉時代には存在し、それは垂直に立てた木に向かって火が付いた松明を投げ上げるといふ、今日の松上げと似た形態の行事で、それは盆に冥界と現世を往来する先祖の通る道を明るく照らし、かつ、死者の供養をも目的としていたことを示したのである。榎本が指摘する通り、南方熊楠はその論考の中で「柱松という物は、現時紀州田辺その他に行われるものと多少作法が違うにせよ、鎌倉時代すでにあったと言わねばならぬ」<sup>(9)</sup>と述べ、さらに『長門本平家物語』の全文を引用し、その解説として「“光明揚げ”は献燈の意で、道路を明るくして冥界から来る先霊に便にした訳、写し柱は故人の影を移し現ずるの義で、柱松はこの二つの目的を兼ねたという解釈のため、右の長縁起を作り出したのだ」<sup>(10)</sup>とも述べている。以上のような榎本の研究に依拠し、筆者は新たに次のような変遷の仮説を提示するに至った。

鎌倉期にすでに存在した「柱松」は、文献から推察するに、今日の松上げとほぼ同様の形態の松明行事であり、それは盆の送り火と同じで、死者供養を主たる目的としていた。ところが、平安末期から鎌倉初期頃に成立したとされる修験道では、柱松の行事を積極的に取り入れ、特にそれを山伏が験力を競うための競技として利用したことから、たとえば愛宕修験や熊野修験等では、柱松の行事を火伏せや悪疫を祓うための松明行事として庶民層に普及していった。それによって行われるようになったのが「松上げ」に代表される松明行事である。ただそれらの松明行事は、修験の影響を強く受けたがゆえに、死者供養や盆の送り火といった性格は希薄となり、多くの例では、村内安全・病氣平癒・火伏せ・悪疫退散などの、いわゆる祓えを目的とした松明行事の性格が強調されるに至ったと考えられる。

一方、室町時代に入る頃から徐々に風流化の道を辿り、元の柱松とは異なった形状の松明行事が生まれた。それが「十二灯系の松明行事」ではないのか。やがてそれはさらに風流化が進んで巨大化し、また回転させたり、いったん倒したものを再び立ち上がらせるといった趣向を



「柱松」 二種の松明行事



凝らしたものとなっていった。それが今日の若狭おおい町や舞鶴に伝わる「オオガセ」や「マンドロ」、あるいは丹後の「十二灯」のような行事であろう。さらにそれらが巨大化し、山の斜面に松明で図柄や文字を描くという形式に変化したものが、五山の送り火ということになる。これらの松明行事は、元の柱松の目的である死者供養や盆の迎えおよび送りのためとする性格を継承しつつ変化してきたために、いわゆる「盆の送り火」としての性格を色濃く残したものとなったと考えられる。しかし行事のルーツが中世の柱松であったことから、盆の送り火に加えて、悪疫退散等の祓えとしての性格をも一部に残す結果となったのであろう。京都の五山送り火が、先祖を送る火であると同時に、一部で悪疫退散をも叶える松明であるとされる所以はそこにあるのだろう。

以上のように、鎌倉期にすでに行われていた「柱松」という松明行事は、その後幾多の変遷を遂げ、複雑な形状と性格を有する「柱松系の松明行事」と「十二灯系の松明行事」という、一見異質な形態を示す二種の松明行事として、今日まで継承されてきたと考えることができるのである。

〔注〕

- (1) 八木透「愛宕信仰と松明行事」(八木透編『京都の夏祭りと民俗信仰』昭和堂、2002)
- (2) 植木行宣「盆行事と火の風流」(八木透編『京都の夏祭りと民俗信仰』昭和堂、2002)
- (3) 植木行宣「盆行事と火の風流」(詳細は前掲)
- (4) 植木行宣「盆行事と火の風流」(詳細は前掲)
- (5) 舟橋秀賢『慶長日件録』慶長八年七月十六日の条(国立国会図書館デジタルコレクションより)
- (6) 和歌森太郎「柱松と修験道」(『和歌森太郎著作集』第2巻)弘文堂、1980
- (7) 和歌森太郎「柱松と修験道」(詳細は前掲)、および柳田国男「柱松考」(『柳田国男全集』第24巻)筑摩書房、1999
- (8) 「浄土神楽と中世芸能」(『現代社会における宗教の力』) 佛教大学総合研究所、2018
- (9) 南方熊楠 「柱松について」(『南方熊楠全集』第3巻)平凡社、1971
- (10) 南方熊楠 「柱松について」(詳細は前掲)

〔参考文献〕

- 南方熊楠 「柱松について」(『南方熊楠全集』第3巻、平凡社、1971)
- 和歌森太郎 「柱松と修験道」(『和歌森太郎著作集』第2巻、弘文堂、1980)
- 五来 重 『宗教歳時記』角川書店、1982
- 岩田英彬 『京の大文字ものがたり』松籟社、1990
- 柳田国男 「柱松考」(『柳田国男全集』第24巻、筑摩書房、1999)
- 植木行宣 「盆行事と火の風流」(『京都の夏祭りと民俗信仰』昭和堂、2002)
- 八木透編 『京都の夏祭りと民俗信仰』昭和堂、2002年
- 八木透編 『京都愛宕山と火伏せの祈り』昭和堂、2006
- 八木 透 『京のまつりと祈り』昭和堂、2015
- 榎本福寿 「浄土神楽と中世芸能」(『現代社会における宗教の力』 佛教大学総合研究所、2018)
- 小畑絃一 『祭礼行事柱松の民俗学的研究』岩田書院、2018

(やぎ とおる 歴史文化学科)

2021年11月11日受理